

## 7 ボランティア

# 主婦ネットが原動力

一年に一度、いわき市で「骨髄バンクを支援するつどい」が開かれる。毎年千人を超える市民が訪れ、たった一日で二百万円から三百万円を売り上げる。

イベントの中心は同市の主婦、齋京子さん(76)。齋さんの夫は、自ら骨髄液を提供したことのある、いわき市立総合磐城共立病院の血液内科医師、齋敏明さん(70)。しかし、「イベントを通じた夫との連帯感?一切ありません。私が始めたのは、あの一言があつたからです」と言い切る。

あの一言とは、この連載でも紹介したが、県骨髄バンク推進協議会運営委員長の陽田秀夫さん(76)の妻で白血病と闘った茂子さん(故人)が、一九九〇(平成二)年に公的バンク設立運動のシンポジウムで発言した、「私の体には時限爆弾が仕掛けられています」という言葉だった。

齋さんはその日、手伝いで会場にいた。そして茂子さんの言葉に大きなショックを受ける。「茂子さんは私よりも若いけれど、同じ主婦で子どもが二人いる。私にも

何かできることがあるのでは」。茂子さんの呼び掛けが、眠っていた京子さんの情熱に「カチッ」と火を付けた。

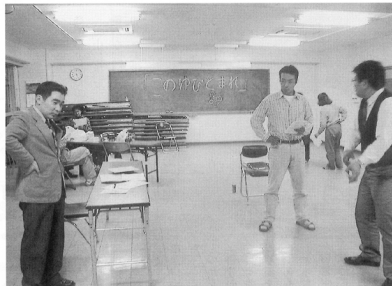
主婦ネットワークを通じて話が

どんどん広がった。やがて、いわきの骨髄バンク運動を全国でも知名度の高いものに押し上げる原動力にさえ発展する。現在は六人の主婦が中心になって活動している。

OBとなった金子さんと陽田さんの熱意に動かされたところが大きい」と担当で原町市で飲食店を経営する水口一八さん(64)。

イベントが年々盛り上がるなかで、齋さんは茂子さんらと永遠の別れを繰り返した。そして齋さんは「たくさんの出合いがあり、いろいろなことを感じられるようになった。ボランティアは特別な人の活動ではないことを痛感しています」と語る。友人が齋さんの中に残してくれた大切な「何か」が、大きなバンク運動につながっている。

もう一つのボランティアが今年の三月五日に原町市で開かれる。原町



「いのちのボランティア事業」での上演に向けて練習を「原町JCCのメンバー」

## ドナー登録推進に講演会や創作劇も

青年会議所(西内清祐理事長)設立三十周年を記念した「いのちのボランティア事業」で、骨髄バンク登録などを訴える。「これまでの活動の集大成だが、

創作劇の脚本を書いた。「骨髄バンクに登録した家族を舞台に、善悪の在り方を問い、問題を提起したい」と語る。劇には市民劇団「駒座」の団員のほか中高校生も出演する。

会場では、骨髄バンクの登録や献血が受け付けられる。「日ごろ、機会のない人たちが日曜日なら来てくれるのではないか」と水口さん。登録拡大に期待を寄せる。